

陶器づくりを学ぶ



陶磁器には花器や食器など用途に応じてさまざまな形や模様があったり、また実用的なものから美術品的なものまであって、その奥深さを感じます。それゆえ、生涯学習センターの「きらめき講座」の中でも陶器作りは、人気講座のひとつとなっています。今回は、講座講師の内山政義さんに陶器作りの楽しさについて聞きました。



作 内山 政義



内山 政義（うちやま まさよし）

茨木市生涯学習センター 講師
京都市立美術大学陶磁器専攻卒業
タイの産業開発センターで陶磁器技術指導と調査研究
京都山科に開窯「百々窯」と命名。その後、亀岡市西別院町に窯を移す。
これまで日本陶芸展をはじめ各地の陶芸展に出品・入選多数



陶器づくりの工程



電動ろくろでの制作



釉掛け前の作品手入れ



絵付け



釉掛け



電気炉の窯詰め

■陶芸の道に進まれたのは

工業高校で電子工学を学び就職は工学系の会社でした。2年間働いた後、もう少し勉強がしたいと思い予備校に通いました。ある日、帰りに立ち寄った百貨店でたまたま陶器の展示会をやっていた、こういう分野もあるのだと初めて知りました。小さいころから絵を描いたり、物を作るのが好きだったこともあって、急ぎょ電子工学から進路を変更して美術大学に進みました。そして、大学卒業後から先生の工房で作陶を始めました。粘土の塊から好きな形が作れるわけですから何をしても面白かったです。

■設計図のようなものを作られるのですか

陶器作りは、作っている最中にも乾燥の度合いなど様々な要因で形が変わってきますが、一応ちゃんとした形を頭に入れておかないと自分の思うものはできません。ええかっこして「土の趣くまに」とか言う人がいますが、できない人がそういうことを言うのです（笑）。私の場合は大きなスケッチブックに実寸大くら

いの絵を描きます。そして、どういう技法で装飾するか、模様も全部描きます。講座でもそうするように言っています。最初は一番簡単な湯呑茶碗から作りますが、1年もすれば陶芸とはこういうものだということが分かるようなカリキュラムを組んでいます。

■磁器と陶器はどう違うのですか

土の粒子の違いです。磁器は粒子と粒子の間に隙間がなくて叩くとガラスのように甲高い音がします。有田焼、清水焼、瀬戸焼などがそうです。一方陶器には隙間があって、叩くと低い音がします。萩焼、益子焼、小幡田焼などがあります。磁器と陶器の間に炻器があります。釉はかかっていませんが鉄分などの色が出てきて自然と模様ができるもので、備前焼や常滑焼などがそうです。このように〇〇焼というのは、江戸時代に各藩でとれる土やそれにあった釉を使って焼いていたため、地域による特色が出たものです。ただ、最近は電話一本、メール一通でどの材料でも買えて〇〇焼が作れます。

■陶器ができてきた歴史について

世界中の陶器の発生は土器からです。ギリシャには大きなオリーブオイルを入れていたような壺がありますし、日本でいえば縄文土器が始まりになります。

土器を作るのは女性の仕事でした。縄文時代の後期になれば土器作りを専門にしていた女性がいたようです。以前、技術指導で滞したタイのチェンマイの近くの村でも女性が作っていました。ろくろはなくて、電信柱を切ったようなものを工場の床に据えて、その上に板をのせ、そこに粘土を紐状にしたものを重ねていきます。それから、ろくろが回転するのではなく人間が回ります。ある程度形になったらあぐらをかいて膝にのせ、内側に石をあてて、外側を羽子板のようなもので叩いて土を締めていきます。そして、庭に稲わらを敷いて乾燥させた作品を載せて、また稲わらをおいて1時間ほど焼きます。稲わらには珪酸分が含まれているので焼けても保温ができるため800度くらいにはなります。一晩おいて冷めたら稲わらの灰を取り除きます。こうして作った土器は小さな孔

がいっぱいあって、そこから水が気化し、気化熱を奪うため水は冷たいし腐りません。このように世界中で土器が作られ、そこから磁器や陶器になってくるのです。焼く温度の高い磁器は中国から朝鮮半島を経て日本に入ってきました。一方、ヨーロッパではガラス工芸のほうが盛んだので東洋の陶芸とは違いがあります。

信楽に青い釉薬がかかったようなものがありますが、これは焼くときに木の灰が作品にかかって自然とできたものです。このように東洋での釉薬の出発点は、焼くことによって珪酸分と灰の石灰分とが化合し、それが偶然に釉薬になったということです。

■タイで指導されたお話

タイに技術指導で行ったのは40数年前です。自然を大事にしてなんでも作る器用な人達なので、教えたらすぐに覚えて作りました。指導の間にはタイの古い窯跡などを見てまわったり、少し発掘作業もしました。タイに宋胡録という焼き物があります。スコートイ県のサワンカロック周辺で作られている陶器で、13世紀ごろラームカムヘーンという国王が中国から陶

工を招いて作り出しました。300年ほど作られていたもので、日本にも主に茶道の器として渡ってきて、今も美術館に残っています。この時代のもは国王や僧侶が使うための器や寺院を建てる建築材料でした。最初は貴重品だった陶器も、生産が盛んになって一般の人でも使えるようになり、輸出もできるようになりました。現在はヨーロッパから量産技術を導入して、安価ですばらしい物が作られています。

■茨木にゆかりのある織部焼について

織部焼は瀬戸焼、美濃焼の系統です。古田織部は武人であり茶人としても有名ですが、どこまで焼き物にかかわったのかよく分かりません。着物の意匠をうまく利用して模様を作っています。緑の釉と鉄絵具で絵を描いて、形も四角や扇型など変形のものも多くユニークです。陶芸家にとっては織部焼に使っている多治見や土岐の土は、耐火性が強くて形を作るのが自由なので使い易いです。焼くと10~20%ぐらい縮みます。初心者には自分のイメージと全く違うものができて戸惑うと思います。焼くのは基本的には薪です。薪を使うことで信楽焼や備前焼

などという特色がでます。明治以降は石炭、戦後は電気、灯油、重油、プロパンなどいろいろと使われています。量産の陶器はトンネル窯といってアーチ状のトンネルにレールがあって、台車に乗せて順番に温度の違うところを2日くらいかけて回っていき製品になります。電気炉は便利ですが、やはり一番面白いのは薪で焼く登り窯です。温度や灰などそのときの状態で、最後にどうなって出てくるかは神まかせです。

■作品づくりについて

大きい作品も作りますが、皿や鉢などをたくさん作ってきました。壺などは展示会で買ってくれる人は少ないですが、皿や鉢はたくさんの方が買ってくれます。みなさんに日常使っていただけるもので、いいものができればと思っています。すごく使いやすいとってもらとうれしいです。ただ、初めから売れる作品を作ろうと思うと作品がどうしても卑しくなります。作品は内面をさらけだしているわけですから、作る人の内面の清らかさが大切です。